産・業・風・土・記

木炭

その現状と問題点

今年は二割の減産……

本県は、高知、島根、鳥取、岩手県などと肩を並べて、全国でも有数の本炭生産県。関西、関東、北九州へも移出して、その品質の良さで好評を博している。

このたびの伊勢湾台風では、球磨木炭協会が、被災者に「暖い冬」を贈ろうと、傘下の集荷業者に呼びかけて、球磨木炭三九七俵を愛知県へ送ったことも、明るい話題として記憶に新しい。

ところで、今年度の生産目標額は二六二万俵生産地は各郡にわたつているが、その半分以上（一五〇万俵）は球磨郡で占め、天草郡が五一万俵、芦北郡一六万俵、そのあとに鹿本郡、八代郡と続いている。

だが、最近原木がパルプ用材（製紙技術の進歩により、広葉樹もパルプ用材として利用できる）や坑木として多量に出荷されるようになつたこと、或はガス・電気・石油などの家庭燃料の進出に押されて、二八年頃から全国的に減産気味。球磨郡の山もとでも「今年は約二割の減産でしよう。」と云つている。そのため価格はやゝ上向き。「それでも、やつと採算がとれる程度です。」とはある生産者の話。「もともと原始的な生産形態の炭焼きです。時代の流れにつれて、年とともに苦しくなるばかりです。」とも云う。

それは何故か？理由は「時代の流れ」だけではなさそうである。

県下の製炭者は約六千名。そのうち専業者が約一千名、残りの五千名は農業の副業として細ぼそと焼いているというのが実情。窯の数から見ると、総数六千三百基というから、大部分は一基の窯に頼つているわけ。

窯一基を築くには、約三万円から五万円もかゝるうえ「原木はパルプ用材などにとられてしまうし、今では山奥に入らなければ手に入らない。値段も二八年頃は、石一二〇円から一三〇円位だつたのに、もう二五〇円乃至三〇〇円位まであがつている。」と云う。

資金をもたぬ製炭者……

こんなわけで、自己資金を持たない製炭者は窯一つ築くことも難かしい。そこで、大部分の人が集荷業者などから資金を借りている有様。なかには生活資金まで借りている人もある。

「私達生産者が団結して、何とか資金面もしつかりと固めたいのですが、炭価が安いので、どうも思うようにはいきません。」と若い製炭者はいつている。

県では、毎年製炭者と集荷業者との間の価格協定については、適正な基準価格を示して協力を求めているので、半数程度はうまくいつている。だが、集荷業者としても色々理由もあつて思うにまかせぬという状況。

生産地によつては、組合でガツチリまとまり新農山漁村建設特別助成で、モデル窯や共同貯炭倉庫などを設置したり、資金面の操作や共同出荷までうまくやつているところも少くない。

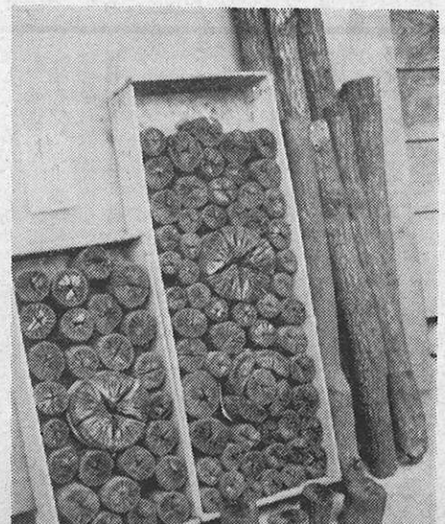
新しい技術を求めて……

県では当面の重点を次の三つにおいている。即ち「生産技術の向上によるコストの引下げ」「需要地に好まれる製品の研究」「経営面の改善」であり、これらは製炭業の現状打開のため積極的に推進しなければならない。

まず生産技術の向上の面では、約六〇名の県の指導員が、各生産地に駐在して指導に当つているほか、昭和三二年から人吉市鹿目（かなめ）の県有林地に県木炭講習所を設置して、築窯、操作、製俵など一貫した技術指導と、実験研究を続けてきた。

特に実験研究面では、球磨事務所が主体となつて、既に高性能の大型窯の試作に成功しているし、又、化学薬品の添加による、雑木炭の歩留りの向上にも成功して注目を集めている。いずれも、地域によつて原木の種類など相違があるので、今直ちに全県下に普及すると云うわけにはいかないが、今後の製炭技術向上の大きな基盤となるだろう。

切炭…樫や楢の木炭を手前のように切つたもの



好まれる「切炭（きりずみ）」……

県産業館では「関西・関東方面では、今までのような十五キロ俵の木炭は敬遠され始めた。都会地ではやはり〝使い良い〟という事が大切だから木炭は短く切り揃え、（次頁の下段へ）

カメラルポ

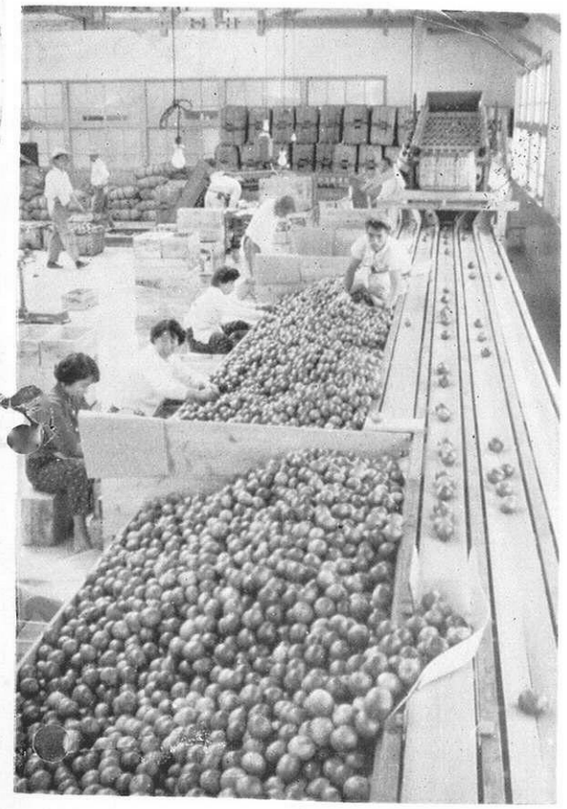
みかんの村から

■こゝ飽託郡河内芳野村では、いまみかんの収穫シーズンをむかえ、山は活況をみせている。採集から、選果、出荷まで作業はかなり合理的に進められている。

（カツト写真は河内芳野村一帯のみかん山）

★　たわゝに実つたみかんを採集する ↑

↓　みかんの鑑別も選果機のおかげでスムースに



★　採集したみかんは農協へ ……↑

★　農協からトラツクで一斉に各地へ ……↓

★……みかんの最盛期は今月中旬から12月まで。県内のみかん年産量は約30,000トン。出荷は県内はもちろん、京阪神から遠くは沖縄に及んでいる。いわば県特産物のホープ